

伊藤潔志『キルケゴールの教育倫理学』書評

山内 清郎

本書、伊藤氏の『キルケゴールの教育倫理学』が出版されたことによって、教育（学）とキルケゴール研究との間の一筋縄でいかない問題設定に一筋の道が示されたことを何よりも祝したい。伊藤氏と似て、教育学・教育哲学を専攻し自らの主要な研究の対象としてキルケゴールを大事にしている筆者としては感謝の言葉を述べたい。続けて詳しく見ていくことになるが、教育（学）とキルケゴール研究は決して相性がよくない。いや、伊藤氏も本書で詳しく論じている通り、単に相性がよくないどころか、両者の関係はある局面では厳しく対立しあうものであると言ってもいい。さて本書は著者の伊藤氏のおよそ15年にわたるキルケゴール研究をまとめたものであり、その構成は次の通りである。

序章 キルケゴールにおける人間存在と教育

第一節 実存哲学と教育／第二節 実存理解の特質

第I章 キルケゴールにおける自己生成の契機

第一節 懐疑と自己生成／第二節 絶望と自己生成

第II章 キルケゴールにおける自己生成の構造

第一節 自然と自己生成／第二節 歴史と自己生成

第III章 キルケゴールにおける自他関係の原理

第一節 単独者への批判／第二節 単独者の社会性／補節 カントにおける隣人愛

第IV章 キルケゴールにおける間接伝達の背景

第一節 間接伝達の成立／第二節 実存の三領域

第V章 キルケゴールにおける間接伝達の実相

第一節 イロニーの機能／第二節 フモールの機能／補節 ソクラテス

の論駁法

結章 キェルケゴールの教育としての実存伝達

第一節 人間理解と教育／第二節 実存伝達と教育

このように本書の目次を見るだけでは、先ほど簡単に指摘した教育（学）とキェルケゴール研究との間の相性のよくなさがどこにあるのかは十分には分ってもらい難いかもしれない。例えば「自己生成」「実存伝達」でもいいし、あるいは「間接伝達」でもいい、さらには「実存の三領域」にしても審美的実存 - 倫理的実存 - 宗教的実存といった人間生成の進むべき段階を記述・提示したものと思われるし、そこから当然、教育の目標も方法も導き出されるのではないか、とキェルケゴールと教育（学）との間の関係について、こういう一般的なイメージをもたれることも少なくないだろう。

だが、両者の関係は決して一筋縄にはいかない。その理由の一つは、キェルケゴールがキリスト教思想家であるという一点のためである。「教育を論ずるとき、キリスト教的な土壌を有していない日本においてキェルケゴールを取り上げる意義があるのか」という難点は、教育（学）とキェルケゴール研究をモチーフとする者にとっては常に悩まされる問題である。

そして従来のキェルケゴールの教育学的・教育哲学的研究においては、そのため、キェルケゴールの思想の中でももっぱら「間接伝達論」が中心的に論じられてきたというのが伊藤氏の見立てである（評者流の表現をするなら、ある意味宗教臭を十分に消臭した上で、キェルケゴールを鑑賞し論じてきたとでも表現すべきか）。本書の構成を端的に記している箇所であるので、以下に少々長くなるが引用をしよう。

そのとき注目されるのが、キェルケゴールの間接伝達論である。〔中略〕これまで教育学研究においてキェルケゴールが取りあげられるときは、間接伝達の問題が論じられることが多かった。しかしそれだけでは、間接伝達の背景にある人間理解についての考察が不十分である。間接伝達論に理論的基底を与えるためには、自己生成論を踏まえねばならない。したがって、

キルケゴールの思想を教育倫理的に考察していく際、自己生成論と間接伝達論とは相補的な関係にあると言えるだろう。(97頁)

本書は上記の第Ⅲ章冒頭のこの文章を、ちょうど間に鏡を挟むようにして見事に構成されている。第Ⅰ章ならびに第Ⅱ章では「自己生成論」を、第Ⅳ章ならびに第Ⅴ章では「間接伝達論」を伊藤氏は論じている。そして「自己生成論と間接伝達論とをつなぐブリッジ」として「自他関係論」を第Ⅲ章に置いているのである。この概観的な見取図に基づき、以下各章の内容を見ていくことにしよう。

第Ⅰ章では、「懐疑」と「絶望」について、自己生成論にいかなる意義を有する概念であるかが論じられる。その手際は、本章のみに限らず基本的に本書全体にも共通するのだが、キルケゴール自身の著作や日誌等の言葉に適宜一つひとつ丁寧にあたり、それに注釈を加えるという文献学的にまことにベーシックな手法を伊藤氏はとられる。

第Ⅰ章で言及され伊藤氏によって解釈されるのは、日誌（若きキルケゴールにおける懐疑の成立）、『あれか、これか』『おそれとおのき』（ファウストへの言及）、遺稿『ヨハネス・クリマクス』、『死に至る病』である。本章の伊藤氏の主題を簡潔に述べれば、以下のいくつかのテーゼとして示すことができるだろう。キルケゴールの懐疑、絶望は否定的契機として自己生成論での不可欠な要素である。彼の生活上の出来事や日誌（いわゆるギーレライエの手記等）をたどることで懐疑の成立を確認する。『あれか、これか』『おそれとおのき』でのファウストの扱いの変遷をたどることでキルケゴール独自の懐疑の特質を明らかにしていく。ゲーテのファウスト（近代のファウスト）がキルケゴール独自のファウスト（現代のファウスト）へと深化し徹底されることによって、懐疑は懐疑に止まらず絶望に達する。遺稿『ヨハネス・クリスマス』の中断は、懐疑の克服（ひいては絶望の克服）が哲学的領域では達成されず信仰の領域（反復）において達成されるものであることを示している。『死に至る病』（冒頭箇所）より、自己は生成でありなおかつ生成の目的でもあるという自己の構造が明らかになる。自己の構造に基づいた、絶望は齟齬である

という規定より、絶望の普遍性や諸形態、そしてその深化の過程・信仰に向かう過程が鮮明になる。

ここまで第Ⅰ章は、キルケゴール研究の基本的図式とも言える話の筋立てであり、すでにキルケゴール研究に従事している者からすれば、少なからずどこかでふれたり目にしたりしたことのあるトピックだと言えるかもしれない。第Ⅱ章は、従来「歴史」概念と比して、キルケゴールの自己生成論と関連づけて論じられることが少なかった「自然」概念・「自然」理解の側面を強調することに伊藤氏の自己生成論研究の特徴がある。これは、伊藤氏が本書で目論む「『教育』という観点からキルケゴール思想を捉え直し、その宗教性の中に潜んでいる人間理解の本質を明らかにすることを第一の課題」とし、その結果必然的に、その豊かな人間理解から「教育に対して何らかの洞察を引き出す」ことになるという（キルケゴール研究と教育的・教育哲学的研究とをみのり豊かに結びつけるための、一見迂回路をたどっているように見えるが、その実、確実な）「教育倫理学的研究」（7頁）の研究方法がよく表れている箇所であろう。

第Ⅰ章と同様にテーゼ的にその内容を振り返るとおよそ次のようになるであろう。キルケゴールの自然科学に対する評価（義兄ルンへの手紙やギーレイエ旅行）は好意的ではあるものの、その守るべき領分があるとするものであった（精神の領域では別の運動法則がはたらく）。自然の中に入ることでえた神秘的な体験（ギルベアアの断崖での体験）から自然はキルケゴールにとって単なる自然ではなく、人間の偉大さと虚しさとが融合するかのような精神の領域と切り離せない現象となる。『野の百合と空の鳥』『愛の業』にうかがえるように、人間が自然に顕現する神を捉え、思い煩いを神に委ねることは、自己生成の重要なプロセスの一部である。他方で「原罪」「飛躍」「瞬間（永遠の原子、時の充実）」「自由」「生成」（『不安の概念』）等の観点からすると、「歴史」とは人間に特有なあり方であるし、これまた自己生成のプロセスである。

第Ⅲ章は、一言で表すと、単独者の非社会性というキルケゴールへの通俗的批判（主としてブーバーによる批判・誤解）に対する再批判・検証という形をとる。この点は、教育（学）的にキルケゴールを研究する際に非常に重要になってくる。というのも、教育学・教育哲学の領域ではいまだ「神に至る道は

独りでしか通れないとして単独者の概念を提出したキルケゴールは教育そのものを拒否した」(3頁、100頁)といった通俗的な解釈がめずらしくないからである。伊藤氏は結論的には、単独者は非社会的でなく、キリスト教的な隣人愛によって他者と関係する社会的存在であり、キルケゴールは愛の思想家であると位置づけている。

本章の中にさりげなく挿入されている、デンマーク語からドイツ語に翻訳された際の訳語選択がブーバーの批判(ひいては後に続いた、単独者が非社会的であるという誤解)に与えた影響を検証している箇所は、教育(学)的にキルケゴールを研究しようとする場合には、今後常に念頭に置いておくべき重要な指摘だろう。エラーの説を紹介しながら説明される、従来、*der Einzelne* という訳語があてられたデンマーク語の *hiin Enkelte* には、むしろ「単純な」「分割できない」という含意をもつドイツ語 *einfach* (英語では *individual* に相当)があてられるべきであり、そこには他者への視点を欠くという含意はない、という伊藤氏の指摘は、教育・教育哲学の領域で見られる「キルケゴールは教育そのものを拒否した」という見解(一種のキルケゴール拒否症)への修正剤として効果的であろう。

第IV章と第V章とは、主として間接伝達についての詳細で丁寧な議論が展開される。トピックとしては、間接伝達の成立に影響を与えた「レギーネ事件」、*「仮名著作」*の成立背景、*「仮名著作」*の表現形式と役割、*「実存の三領域」*、ソクラテスに多くを負っている「イロニー」の成立、同じく多くをハーマンに負う「フモール」、イロニーならびにフモールの三領域内での位置づけ、等々。第IV章・第V章のトピックは非常に多岐にわたるが、同時にそれだけ伊藤氏が一番力を入れておられるところに思われる。ここで粗雑なまとめをするよりも、できれば読者には本書に直にあたっていただきたいところである。本書で伊藤氏がかつても苦勞されたであろうし、その分、工夫を重ねられた「教育倫理学的研究」の研究方法が、その新しさを主張するのは、次のような文章である。

〔教育学・教育哲学では主として倫理的伝達を担うイロニーに注目が集

まっているという事態を受けて：引用者註]しかし、キェルケゴールにおいて宗教（キリスト教）は思想の核心を占めており、キェルケゴール思想からキリスト教を取り除いて考えることはできない。教育倫理的考察でもってキェルケゴール思想の宗教性の中にキェルケゴールの人間理解の本質を探ろうとする本書の問題意識からいって、イロニーだけに注目しフモールを切り捨てるといった行き方は採るべきではない。イロニーはフモールを前提にして考えられており、イロニーにも宗教的な要素は多分にある。また、イロニーがフモールの下位概念であるとするならば、イロニーだけに注目するのは、キェルケゴール思想の理解としては不十分であろう。(204頁)

本稿では、この第Ⅳ章、第Ⅴ章が非常に大切な箇所であるだけ、かえって目立って気になった点を数点指摘させてもらいたい。まずは、実存の三領域、そしてイロニーは倫理実存の微行態でありフモールは宗教実存（宗教性B）の微行態であり、自分より低い実存に対して、より高い実存への飛躍を促す存在様態である、という指摘についてである。伊藤氏の本書全体を通しての文献学的にベーシックな手法、手堅い解釈はもちろん利点であるのだが、それは従来のキェルケゴール解釈の枠を大きく外れることはないという点とトレードオフの関係にあると思う。評者の見る限り、この自著の構造の図式は確かにキェルケゴール本人が述べているものだが、それほど明快にキェルケゴールの諸著作に合致するものとも思えない。著者自身が自らについて説明できない、あるいは説明に失敗しているかのような箇所を解明してくのも思想研究の醍醐味であると思う。その点、この教育（学）とキェルケゴール研究との展開の足がかりとも呼べる基礎作業をなされたあとの伊藤氏が、どれだけこの枠から外れた思いがけなさをもった研究を展開されるのか、強く期待されるところである。

次に、フモールについてのまとめにあたる箇所で、伊藤氏は「悲哀に満ちた微笑」「この微笑みの暖かさ・優しさ」という言葉を何回か繰り返されている(222-223頁)。本書全体を通して著作等のキェルケゴール自身の言葉に丁寧にあたり注釈を加えるという手堅い手法をとってこられた伊藤氏にしてはめずらしく、ここはフモールという言葉の通俗的含意が、厳密な文献学的解釈・注釈に

先走ってしまっているのではないだろうか。フモールについて多くのキルケゴールの言葉が第V章で引用されているが、そのどれからもキルケゴールのフモールの「暖かさ・優しさ」というものは導き出せないように評者には感じられた。彼のフモールは、(伊藤氏自身が本書ですでに指摘されている)「真剣さに基づいた冗談」(217頁)という表現の方がまだ的確であるように評者には思われるのだからだろうか。

最後にいくつか気になった点を指摘、質問させてもらうことになったが、それは本書の価値をいささかも損なうものではない。本稿の冒頭に示したような教育(学)とキルケゴール研究との相性のわるさに「教育倫理学」という新たな研究方法を案出し、取り組まれた本書によって切り開かれた「キルケゴールと教育(学)」という土俵、フィールドはかけがえのないものである。教育学・教育哲学の領域でキルケゴールをモチーフのひとつにしている同好の士として、今後このフィールド、土俵で伊藤氏と議論を交わしともに思想研究を深化させることができればと強く感じられた。